

〔共同研究〕

室町期における諸宗兼学仏教の研究（十四）

—澄円『浄土十勝論』の書き下し—

室町期における諸宗兼学仏教研究会

はじめに

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）に着目し、著書『浄土十勝箋節論』（以下、『浄土十勝論』）十五巻ならびに『同輔助義』四巻を取りあげて、浄土学・真言学の研究者を中心に研究を行っている。

具体的には、これまで一度も活字化されていない『浄土十勝論』『同輔助義』について、嘉永五年刊本へ文久四年再版本を底本とし、翻刻・書き下し文・語注の作成を中心に行っている。また、澄円とその著作に関する個人研究を翻刻作業等と並行して行っている。

今年度の共同研究については、巻中乾上の書き下し及び出典注の作業を行った。次年度も引き続き書き下しならびに出典注をほどこす作業を行う予定である。また、個人研究も計画的に進めていきたいと考えている。

凡例

- 一、本編は『浄土十勝論』の嘉永五年刊本（文久四年再版）を底本として、書き下し・出典注を施したものである。
- 一、書き下しに際し、字体は原則通用漢字に改めた。
- 一、また、書き下すにあたり、底本で判読できない箇所については、大正大学所蔵・寛文三年刊本（寛文本）を参照した。

【書き下し及び注】

浄土十勝箋節論卷中

乾上

菩薩大乘戒比丘澄円撰

無解大乘勝第四十

夫れ以れば、漢光数千の士卒、呼沱の波瀾をりしや。一念澄淨なる所以なり。李将行孝の箭鏃、野中の黄石を貫きしや。誓心堅固なる所以なり。吾が門の所謂「法既本妙麤由物情但開其情復本」之れと相同じ。然れば即ち麤食者の『法華』を解すれば、醍醐変じて雑血と為り、円行人の権教を会すれば、麤法反つて妙法と為る。天台智者の曰く、「三業の中に意業を主と為す」と。居あきらかに此の語誠なるかな。学者心を留めよ。諸爰に吾が宗持名の行人は然らず。其の解了を謂わば、無相真如第一義空、曾て未だ心に措かず、其の造罪を謂わば、四重、八重、五逆、十惡、更に一毫をも制せず。然りと雖も弥陀尊号の靈徳に持せられて、大乘行人の佳名を得たり。焉んぞ私議すべけんや。居あきらかに例せば、かの四洲臣属し、諸神翼従すれば嬰孩無識と雖も、金輪聖王の尊号を得るが如く。また、三密修行し諸尊冥護すれば、未だ顕加の位に及ばざれども、秘教修行の大人と名づくるに似たり。然れば即ち、持名の行人を以て大乘の修者と名づくることは、是れ行者の解了に關して以て之れを論ずるに非ず。正しく法体の徳用に約して、以て語ることを為すのみ。何言うぞや、夫れ持名行者の相貌を案ずるに、縁事縁理の誓心莫かれば、大乘の行人とも名づけがたく、沈空滞寂の独情を闕けぬれば、小衍の修者とも号し難し。正しく是れ、ただ作惡のみ知りて微善をも修せざる類のみ。此等の人を以て究竟大乘の行者と称することは、明眼の智人在りて彼の所修の妙行を見て、これを褒歎する語ならんと謂うことなかれ。行人の解了に約して、以て其の義を論ずとは、

夫の黄離は青陽の節を知り、蟋蟀は朱夏の時を識り、石燕は降雨の日を知り、林鳥に反哺の孝あり、野人の孝行を致し、子女が恩孝を勤め、蛇は王氣に向かいて蟠まり、鵲は太歳を背いて巢口を開き、燕は戊己の日を除いて泥巢を銜む等と言うが如きに至りては、豈に是れ其の物情を言うならんや。只だ是れ知者の之を言うのみ。

問て曰く。持名の行人を以て正しく大乘の上類と名づけ、修者の解了に約せずして大乘の佳名を与うこと、正く出て何れの経釈の現文に在るや。

答えて曰く、且く『大乘莊嚴經』に云く、

若し善男子善女人有りて、無量寿仏の名号を聞くことを得て、一念の信心を発して帰依瞻礼すれば、当に知るべし。此の人は是れ小乗に非ず。我法の中に於いて第一の弟子と名づくることを得^上と。

又た、始祖玄閑大士『論註』に云く、

問て曰く、上に生は無生なりと知りぬと言うは、当に是れ上品生の者なるべし。若し下下品の人十念に乗じて往生する。豈に実の生を取るにあらずや。但し実の生を取らば、即ち二執に墮せん。一には恐くは往生することを得ず。二には恐くは更に生惑を生ぜん。答う、譬えば淨摩尼珠を之れを濁水に置けば、水即ち清淨なるが如し。若し人無量生死の罪濁に有りと雖も、彼の阿弥陀如来の至極無生の清淨宝珠の名号を聞きて之れを濁心に投ずるに、念念して中に罪滅し、心淨くして即ち往生することを得。又た是れ摩尼珠を玄黄の幣を以て、裹^つんで之れを水に投ずるに、水即ち玄黄にして、一ら物の色の如し。彼の清淨仏土に阿弥陀如来の無上の宝珠有り。無量莊嚴功德成就の帛を以て、裹^つんで之れを往生する所の者の心水に投ずるに、豈に生の見を転じて無生の智と為すこと能わざらんや^上。

又た、『決定往生集』に云く、⁴⁾

世俗の凡夫、纔かに信心を起して、大乘経の無所得の教を受けて、無所得の浄土の仏を念じて、称名し作礼すれば、皆な無得を成ず。法力に由るが故に自然に成就するなり。然此れ等の文に準ずるに、世俗の行人、設い自ら中道法門の文義の相を知らずとも、但だ能く仏徳を念ずれば、自然に無得を成ず。梵天王の自ら甘露を作りて其の味を知らざるが如し。西方の行者も亦た爾なり。自ら無所得を作りて而も自らは無所得なることを知らず⁵⁾と。

夫れ両賢経に依りて遅しく之れを得たり。今重詳せず。故らに示さん。自作甘露、不知其味の文、学者、指を染めて焉を試みよ。又た、竜猛大士の『菩提心離相論』に云く、⁵⁾

菩提心とは、一切の性を離る。問て曰く、此の中に云何んが一切性を離る。答う、謂く蘊処界、諸の取捨を離れて法無我平等を自心本来不生自性空なるが故に⁶⁾と。

此れは縁理無相の菩提心を明かすなり。西郊の弁公上人、上の文を判して云く、⁶⁾

此れは大乘に約して菩提心の体を説く。法無我の理と相応する心、此れを指して菩提心と云う。問て曰く、此の心最も甚深なりとす。我れ等未だ法無我等の道理を知らず、何ぞ菩提心を発さんや。答て曰く、此の心、甚深に非ず、謂く行者善縁に遇いて卒爾に仏境を縁じて、毛豎ちて涕を流し、希求の心を発す。此の心の自性を推檢するに、法無我の理を以て所依とすと言う。更に自ら法無我等の理を知ると謂うには非ず。⁷⁾

聖道猶お爾り。矧や浄土に於いてをや。問て曰く、孰か知らん。莊嚴の文は無想解了の上の帰依瞻礼を説かんとは如何ん。答て曰く、只だ「得聞名号、非是小乘」と宣べて、未だ無相甚深の妙解有りともしわす。仁者、奚ぞ自ら封拙を生じて、以て迷惑えるや。『攝大乘論』に曰く、「了義大乘依文判義」⁸⁾之

れを以て之れを觀れば、經に所謂る「発一念心、歸依瞻礼」の言は、只だ散心無觀の称名を顯すのみ。行者等、早く漆桶の慮を抛て、速かに鳳膠の志をきつべし。若し爾らば、是れ千即千生か。是れ万不一失か。難じて曰く、「法妙麤情、開情復本」と云うが如きは、是れ則ち機解の不同に由りて、法門の淺深を判ずるの意なり。然るに今、持名行者の心念の相を案するに、只だ是れ默苦欣淨の自利心にして全く無相深玄の妙解も無く、又た有為行願の宏誓をも闕けり。若し縁事縁理の菩提心を具足せずんば、争か大乘至極の行人と名づく可けんや。

答て云く、万法に皆な、横具豎眞の二途有り。所謂る或いは法在一心、説必次第と云い、或いは總在一念、別分色心と云い、或いは印文読誦、同異各別と云うが如きは是れなり。衆生の発心も亦復た是の如し。若し行者有りて、或いは一実菩提の解了を發し、或いは四弘甚深の誓願を起す等は是れ豎発の菩提心なり。又た只だ一念信解の上に二種の菩提心を周備する、是れ横具の菩提心なり。此の義諸教の通談なれば、毛拳するに違あらず。且く弁公上人の『莊嚴記』に云く、

至相大師の『發菩提心章』に云うが如く、体性とは、義の不同に隨う。略して三種有り。一つには相發、二つには息相發、三つには眞發なり。相發と言うは、深く生死の過、涅槃の福利を見て、生死を棄捨し、涅槃に趣向して、相に隨いて默求するを相發心と名づく。息相發と言うは、深く平等を悟り、其の生死本性、寂滅涅槃も亦た然なりと知りて、前の相を背けて、正如の道に歸するが故に名づけて發とす。眞發とは、眞性もとより由來已体なり。彼の異求を捨てて、実相現前するが故に發心と名づく。勢問う、此の心甚深なりとす。凡夫何ぞ之れを發さんや。答う、我法二執は、恒時に起ると雖も、教に遇わずんば、未だ名義を知らず。道心も亦た是の如し。愚昧の人、名義を知らずと雖も、此の心、起り難きに非ず。謂く、善友に親近し、正法を聴聞すれば、即ち正見を起す。正見と相応

する心は、即ち自ら二空に順ずるなり。若し違法は即ち二体有り、順法は即ち二体無し。離相論に云うが如く、諸仏世尊、咸く是の説を作す。悲心所生の無量の福聚は、彼即ち最上真実の空理なり。

諸仏威神の出生する所の自利利他の二行成就す云と。此れ即ち真俗二行相順し、事利二体、違せざればなり至乃説広。¹⁰

此の釈の意の云く、行者等相息真発等の三種の菩提心に於て一一別発せずと雖も、只た正法を聴聞して即ち正見を起す。一念の上に於て具に発菩提心の徳をそそげたりと。

是れ即ち横の発心の意なり。之れを以て之れを觀れば、欣求西方の行者等、設い縁理縁事等の菩提心を発さずと雖も、正しく報身如来を頼つて界外の報土を欣求する心だに有らば、専ら横に大乘至極の心を發起する人と名くべき。道理掲焉なる者なり。海公詳勘して「梵王甘露を作して其の味を知らず」と言える。蓋し此の謂いなり。既に横具の三心五念有り。奚れを横具の發大乘心母たらんや。有智高識の学者、知ぬべし。

問て曰く、若し持名の修者を以て直に大乘の行人なりと名づけば、専ら穢国に住して群萌を利濟すべし。然るに、ぞ急かに東隅を捨てて、西方に走り、迷徒を背いて自証を求むるや。

答て曰く、菩薩に二種有り。一には曰く智増、二には曰く悲増なり。智増の人は自証を先とし、非増の類は利他を本とす。二人各別にして先後不定なり。此の義『智度論』¹¹に見るに、知らんと欲せばもち之を以て看よ。問て曰く、持名の行者等、設い縁理縁事の二種の発心無しと雖も、専ら大乘の行人と名づくべきこと文理炳へい焉えんなれば、所立成じ竟ぬ。若し爾らば、西方の行人は要す当に他を先とし、自と後にすべし。然る所以は、且く『涅槃経』の迦葉菩薩礼仏の偈に曰く、

発心と畢竟と二つを別たす。是の如きの二心、先の心難し。自ら未だ得度せざる。先ず他を度す。

是の故に我れ初発心を礼す。初発心は人天の師なれば、声聞及び縁覚に勝出す。是の如の発心、三界に過ぎたり。是の故に最無上と名づくることを得と^上。

然るに今、安養の行者を見聞するに、穢土を厭いて浄土を欣い、衆生を捨てて自樂を求む。豈に大乘の行者と名づくべけんや。

答て曰く、斯の問答、天台尊者の『十疑論』、玄忠禪師の『安樂集』、千福大徳の『群疑論』等の諸書に出でたり。文広きが故に於是に載せず。後進自ら看よ。

請い問う。之れ曰く、且く、『十住毘婆沙論』に云く、

問て曰く、何が故ぞ我れ当に衆生を度すべしと言わずして、自れ得已つて当に衆生を度すべしと言うや。

答う。曰く、自ら未だ得度せざれば、彼を度すること能わず。人の自ら泥に没するが如きは何ぞ能く余人を救拔せん。又た水の為に漂わさるが如く、溺を濟うこと能わず。是の故に我れ度ち已つて当に彼を度すべしと^上。

『法華疏記』第一に云く、

自行、妙宗に暗ければ、何ぞ目無くして導くに殊ならん。彼れ此れ俱に迷い、自他咸く没すと^上。

又『毘盧遮那經疏』第十に云く、

又た普く一切衆生を度するを名けて極度とす。若し人自ら未だ度を得ずして人を度すことを得といわば、則ち爾るべからず。若し自度して又た能く人を度せば、斯れ是の処^{ことわり}有り^上。

又た同第十四に云く、

若し寒くの自ら了知せずんば、設い他に種種に開導すとも、終に得る理無し。若し人、自らは是の如

きの内証の法を開発せずして、人の為に説いて他をして悟らしめんと欲せば亦復た是の^{ことわり}処有ること無し。何を以ての故に無足の人有りて衆人を呼召して、是の如きの言を作さく、我れ当に汝を^{たす}為けて妙高山の上に登るべしというか。当に知るべし。此の人は必ず智者の為に輕笑せらるるなり。何を以ての故に。若し自ら無足の者は、尚、自らはの如きの妙高山王の少分の高処にも登ること能わず。況^{たと}えば能く一切を^{たす}為けて、彼の頂に登らんや。又た、人有りて未だ大海の波浪を渡ること能わずして、而も他に謂いて我れ当に汝を渡して彼の岸に達せしめんと言わんが如し。当に知るべし。亦た是れ理を得ること有ること無し。行人も亦た是の如し。若し自ら未だ無師の慧を覺らずして他をして聞法得悟せしめんと欲せば、必ず此の理無し^上。

是れ乃ち円密二宗の大乗行者の自を先とし、他を後にするの明^{そと}掬なり。抑、先自後他の教誡は、^た密内法の所談に局るのみに匪^たず。外談も亦た然なり。且く『南華の真經』に云く、⁽¹⁷⁾「古の至人は先ず諸の己に存して後に諸人に存ず」^上と。

『疏』に云く、

諸は於なり。存は立なり。古昔の至徳の人は懷^{おも}を虚しくして、世間に遊び、必ず先ず己が道を安立して、然して後に他人をす。未だ己身に存せずして能く物を接する者有らず。古人を援引して以て鑿^{たく}誠と為^しと^上。

問て曰く、^{なんそれ}胡ぞ先自後他と先他後自との不同有りや。

答て曰く、此れに二義有り。一には曰く、智増悲増の異、二には曰く、浅位深位の殊のみ。若し之れを以て之れを言わば、欣求浄土の行者は是れ智増の菩薩か。亦た浅位の索多か。涅槃所説の菩薩は或いは悲増か。亦は深位か^{住初}。悲智浅深其の人殊りと雖ども、俱に是れ大乘の行者のみ。

問て曰く、悲智の二聖、何れを以て勝と為るや。

答て曰く、浅位悲増の菩薩には二人俱没の失有り。下位智増の菩薩は並ぶるに難を出すことを得るの得有り。若し爾らば悲増の菩薩は一鞭殿ひとむちのぼくれたるか。又一義有り、光に云く¹⁹「若し自利せざらんば、何ぞ能く利他せん。經に菩薩と言うは、利他の為すとは意樂に抛りて説く」²⁰。若し之れに依りて之れを觀れば、一切の菩薩等、若し発願の時は、必ず他を先にし、自を後にす。若し起行の日は、定めて自を先にし、他を後にする者か。若し此の義に背して、初心始行の菩薩等、強て自ら未だ度を得ずして、先ず他を度せば、教に違し、理に乖かんか。智人思択せよ。

夫れ問て曰く、機解に閑からず、境界に任せて勝徳を勘判すること何れの処に出たるや。

答て曰く、なんじ而來たれ、吾れ語らん。夫れ世親論主は定業の相貌を定め、荊溪尊者は円經の徳用を判ずる等、是れ其の誠証なり。又た弘法大師の『真言問答』に曰く、²⁰

問う余乘に依らず、頓悟門に依りて、三密の行を満じて、此の生に道を成ずる。先ず頓悟を証し、次に余義を成ぜん。他宗の説く頓悟と真言門の頓悟と、同とや為ん、異とや為ん。答う、頓悟の義同じと雖ども、其の意少異あり。問う異の意、如何。答う、余教の頓悟は根熟し、時を待りて頓に大乘に入る。密乗の頓悟は初心の凡夫、此の生証悟するなり。所以に異と云うなり。問う、初発心の人、此の生に証すとは、華嚴宗の初発心、時便成正覺の如きか。答う、彼と亦た不同なり。問う、爾らば如何。答う、彼は即ち或いは利根の者、円の一分の理を覺悟する義邊にして、究竟の覺に非ず。此の真言教は凡より仏位に入ることを得るのみ。問う、頓悟の異は爾るべし。何んが故ぞ顯教は機熟れば悟ることを得。真言門の中には、初心に入ることを得るや。答う、教力に浅深あるが故に爾なり。問う、何なるが教力の深、何なるが教力の浅ぞ。答う、顯は浅く密は深し。問う、此の義爾

る可からず。所以は何ん。根熟の人は有智の故に即ち能証の智深きに隨て、所証の理、是れ応に深なるべし。初心の識浅く、即ち浅識の故に所入浅なる可し。所以に顕教は深なる可し。根熟して証るが故に、真言は浅なる可し。初心にして入るが故に。答う、是れ爾らず。問う、然らば如何。答う、浅略門は教力劣なるが故に。頓に初心の凡夫を引くこと能わず。深秘門は法力勝れたるが故に。此の生に仏位に起昇することを得せしむ^上。

此の所判は所修の行境に從て、教法の深淺を詳にす。学者見つ可し。抑、^{そもそも}靜に諸方学者の難勢の趣を案ずるに、多く念仏の行者は縁事縁理の誓心亡きが故に、大乘の行者とは名け叵し。若し大乘の持者に非ずんば、焉ぞ小行修者の劣名を遁れんやと言えり。小子彼に対して曰く、持名の行人は正しく沈空滞寂の小心無きが故に。小行の行者とは号く可からず。若し小乗の行者に非ずんば、闔んぞ大乘の佳名を与えんや。夫れ持名の行者を以て、大乘の行人と名くることは、猶お是れ附傍寄在の教相にして、全く元意独一の勘判には非ず。例せば念仏を以て陀羅尼藏に同じ『觀經』を以て方等部に属するが如し。何の言いぞや。所謂、偏小権大、顕実密実、教外別伝の上の一層級に居して絶待独一、究竟大乘の義を清談すべし。

問て曰く、其の義、何如。

答て曰く、夫れ其の機根を謂えば、是れ一向行惡、行不修微善法の惡輩なり。其の所修を謂えば、乃ち難可思議無上功德の尊号なり。是れ則ち難思の機法なるが故に。四記せば之れを記せず。三量も之れを量せず。既に三量四記の及ぶこと能わざる所なるが故に。亦た大小勘判のぶこと能わざる所なり。若し爾らば持名の行者を以ては、只だ難思感応の妙機と名け、大小兩乗の通号を絶去すべきのみ。但し、若し非大非小の機法の上に於て、且く強いて其の称号を与えば、過未不談の最勝上上の大根機と名づくべきなり。是れは斯れ、最上秘法の手を伸べて、以て最下魯鈍の人を提ぐるの義、篇に約して以て語うこと為す。学

者、迷を致すこと莫れ。若し剛明卓抜の高識を負て、酬酢決扱の故質に達するに非る自りは、其れ孰か能く此れを信ぜんや。上根上智、大度量勇銳の大丈夫、自量して知れ。原るに夫れ、聖道の諸宗は透徹を以て本と為るが故に、義解を根元として以て契証し別願の玄極は往生を以て先と為るが故に、平信を正因として、以て即詣す。無解の出離を教示するが故に、教法は諸宗の最頂に居り。実相の解了をい奈んともせざるが故に。当機は鈍根の下輩に被しむや。誠にはれ最尊最上の大法、易行易修の要行なる者をや。夫れ吾宗二祖、綽公大師、経を引きて曰く、

人寿百歳なるも、夜は其の半を消す。即ち是れ五十年を減却するなり。五十年の内に就て、十五已來は未だ善惡を知らず。八十已去は昏耄虚劣なり。故に老苦を受く。此れ自り外、唯だ十五年の在る有り。中に於て外には則ち王官逼迫して長征の遠防し、或いは繋がれて牢獄に在りき。内に則り門戸吉凶衆事の牽纏われて梵梵忙忙として常に求むるに足らず。斯の如く推計するに幾の時か有りて道業を修することを得可き。此の如く脱量する。豈に哀しまざらんや上。

南無阿弥陀仏。

凡夫長寿勝第四十一

夫れ生者必滅は是れ五道輪廻の定憂、会者定離は適ち三界流転の常苦なり。所以に欲界の天人は五衰の朝の霜を悲しみ、北州の衆生は千年の夕の露に泣く。設い有頂の八万大劫と雖も只だ是れ莊周一夕の夢か。設い他化の一万六千と雖も亦た即ち蘆生半炊の眠か。ただただ畜滓濁惡世の衆生に匪ず。電光短祚の恨有るのみ。又た離垢世界は是れ上品の浄土と雖も其の国、人民、寿八小劫と宣べたり。孰れの人か之れを愁吟せざらんや。居い何れの彙いいか、之れを傷嗟せざらんや。

爰ここに安養淨刹の衆生は寿命無量にして、更らに終尽の期無く、且つ体相金剛にして全く破敗の時無し。弥陀本誓に曰く、⁽²²⁾

設し我れ仏を得たらんに国中の天人、寿命能く限量無からん。其の本願あて脩短自在ならんをば除く。若し爾らずんば正覺を取らじ^上。

又た『經』に云く、⁽²³⁾

無量寿仏の寿命、長久にして称計すべからず。^至声聞、菩薩、天人の衆の寿命の長短も亦復た是の如し^上。

又た室羅筏城逝多林中所説の『無量寿經』に云く、⁽²⁴⁾

彼の仏の寿命及び其の人民、無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づく^上。

又た『稱讚淨土經』に云く、⁽²⁵⁾

又た舍利子、極樂世界淨土の中の仏を何の縁有りてか、無量寿と名づくるや。舍利子、彼の如来及び諸の有情、寿命無量無数大劫なるに由る。是の縁に由るが故に彼の土の如来を無量寿と名づけたてまつる^上。

宗家大師、之れを受けて曰く、⁽²⁶⁾

果、涅槃を得て常に世に住す。寿命延長にして量るべきこと難し。千劫、万劫、恒沙劫、兆載永劫にして亦た無央なり。^至十方の凡聖、心を専らにして向かい、身を分かち化を遣わして往きて相い迎わしめ、一念に華に乗じて仏会に入る。身色寿命、尽く皆な平し^上。

又た二祖綽公大師『安樂集』に云く、⁽²⁷⁾

若し阿弥陀の淨国に生ずれば、寿命長遠にして不可思議なり。是の故に『無量寿經』に云く、仏、

舍利弗に告げたまわく、彼の仏を何が故ぞ阿弥陀と号するや。舍利弗と十方の天人、彼の国に往生する者は寿命長遠なること、億百千劫にして仏と同等なり。故に阿弥陀と号すと。各宜しく此の利の大なることを量りて皆な往生を願はずべし^上。

又た、慈恩大師『通讚』に云く、

經に又た、舍利弗、彼の仏の寿命、及び其の人民、無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づくこと。讚じて曰く第二に、寿命の得名を答う。寿命とは第八識の上に連持の功能なり。即ち是れ不相応行の中の摂なり。無量とは、其の限り量り無く、無辺とは、彼の辺際無きを云う。阿僧祇劫とは、此れには、無央數劫と云う。問う、彼の尊、彼の衆、身、有為に属せば、未だ四相の遷移を逃れず、争か一期の磨滅を免れんや。答う、両重の生死を捨てて、五蘊常身を獲る。悲願無辺なれば身命何ぞ尽きん。況や又た殺業久く已み、寿命延遠なり。問う、弥陀は已に果位に居して寿命の無量なること然るべし。人民は見に因中に処す。何が故ぞ亦た彼の仏に同じからんや。答う、業累輕尠にして善種^{ますます}増強し。既に分段の身に非ず。永く去來の質を離ること、仏と齊^{ひと}等しくなること理に於て、違ふこと無し。故に『無量壽經』に云く、彼の仏の寿命長遠にして稱計すべからず。仮使、十方世界の無量衆生をして、皆、羅漢と成ぜしめ、共に尽く思惟すること百千萬劫すとも、寿限を知らず、菩薩天人の寿命も亦た爾なり^上。

夫れ甚だ怖畏すべきは、是れ死苦なり。大いに求惜す可きは、亦た命財なり。設い但だ受諸樂の淨利と雖も、若し一形寿命の定限有らば、遺恨幾許ぞや。譬えば、金杯の底無きが如く、又た摩尼の碎瑕に似ん者か。抑、畜生を貧し、死を惡むのみにあらず。亦た、修行仏道には、死魔を恐れと為し、生死の間隔は退大の根本なり。然るに、安養淨刹の衆生は寿一劫百劫千万億劫ならんと欲せば、自在に意に隨いて、

皆な之れを得べし。無為自然にして、泥恒の道に次げり。凡そ寿命長遠の巨益は安樂第一の靈徳なり。焉ぞ思議すべけんや。夫れ桜梅桃李の風に散ずる春の夕には、世上の虚華を歎じて、南謨の妙行を修し、黄菊紫蘭の霜に萎れる。秋の朝には生死の苦果を想いて、西方の常楽を欣う。抑、如来の尊号は愛海の波瀾を超越る堅牢の舩筏、法蔵の誓願は安養の淨刹に詣る。金輪の宝輅なり。南無阿弥陀仏。

尼衆往生勝第四十二

夫れ日月の光用を蓋覆する者は、是れ雲煙、塵霞、阿修羅なりや。諸仏の報土に詣でざる者は、乃ち五障、三従、穢質の女人なり。然るに弥陀覚王の大願業力に執持せらるる者は、忝くも五障の女身を以て直ちに九品の報土に至る。此の義、五千四十八卷に之れ明さざる所なり。此の旨、三国伝灯祖師の談ぜざる所なり。只だ是れ弥陀三部の秀句、夫れ光明一家の高判なり。仰ぐべし、崇たかぶべし。

但し論文に女人を簡するに似ると雖も、支那四百州の群英、皆な悉く之れを通曾せり。学者見つべし。

問て曰く、沙竭竜女、愛道、耶輸、是れ女質なりと雖も行位初住教門に居り、後有、報土に在り。今と殊ならず、如何。

答て曰く、此の難、不類なり。竜女二尼、女人為りと雖も、真修体顕、即無差降の高位に昇りて、自然流入、薩婆若海の徳を具せる、と。今の所談と天懸にして全く比類に非ず。兩尼、竜女等の後有、実報に在ることとは、只だ応に是れ地住の索多の報土に生ずるなるべし。彼の智者大師、報土得生の機品を定として、地住已上、皆得往生と云うが如し。

問て曰く、天台尊者、靈芝律徳等の諸賢、夫人の得忍を判として俱に「断破無明証人初住」と云えり。若し爾らば、毘提夫人、耶愛竜女と一等にして差たがうこと無し、如何。

答て曰く、他師は夫人の無生を高ぶりて以て真因初住に属すと雖も、今家は信位の安心と定めて、解行已上を遮す。今は宗師の定判に依りて以て語ることを為す。学者、相濫すること勿れ。

問て曰く、女人往生の明文、出でて何れの処に在りや。

答、弥陀の本願に曰く、

設し我れ仏を得たらんに十方の無量の不可思議の諸仏世界に其れ女人有りて、我が名字を聞きて歡喜信樂して、菩提心を発して女身を厭惡せんに、寿終の後、復た女像と為らば、正覺を取らじ」^{上巳}
宗家、此の願文を引きて詳勘して曰く、

義に曰く、乃ち弥陀の本願力に由るが故に、女人、仏の名号を称すれば、正に命終の時、即ち女身を轉じて男子と成ることを得。弥陀、手を接し、菩薩、身を扶けて宝華の上に坐らしめ、仏に隨いて往生し、仏の大会に入りて無生を証悟す。又た一切の女人、若し弥陀の名願力に因らざれば、千劫、万劫の恒沙等の劫にも終に女身を轉ずること得べからず。応に知るべし。今、或いは道俗有りて、女人、浄土に生ずることを得ずと云わば、此れは是れ妄説なり。信ずべからず。又た此の經を以て証するに、亦た是れ摂生増上縁なり^{上巳}と。

經釈の炳文、見易きが故に註解せず。抑宝樹檀林の春の花は遠く薰を称名の風に伝え、万徳円明の秋の月は遙かに光を持念の窓に耀かす。先聖、言えること有り^{上巳}。

当に知るべし。諸余の苦患は或いは免るる者有り。無常の一事は終に避るに処無し。須く説の如く修行して、常樂の果を欣求すべし^{上巳}。

此の言、誠なるかな。五蘊無常なり。孰れか四山の責を免れん。九品易往なり。曷ぞ三字の勤めを怠らんや。南無阿弥陀仏。

魔不能便勝^{第四十三}

夫れ牟尼至尊の積劫行満なるや。猶お、三女四軍の悩乱を免れず、優婆鞠多の証果の聖者なるや。亦た即ち他化天子の留難に値えり。是れ併しかしなら自力断証の致す所なり。然るに吾が門の修行は四魔跡を削り、波旬競を済とどむ。是れ則ち摂取不捨の光益を蒙れる所以なり。經に云く、⁽³²⁾「光明遍く十方世界を照して、念仏の衆生を摂取して捨てず」^上と靈芝の云く、⁽³³⁾

当に知るべし、我が輩、仏光の中に処して、都て覚知せず、仏光常に摂して略へて厭棄したまうこと猶し盲人の日輪の下に居るが如く、又、溷虫の樂いて穢処に居るが如し。膺を撫でて自ら責めて実に悲痛す可しと^上

楞嚴の云く、⁽³⁴⁾

我れ亦た彼の摂取の中に在れども、煩惱に眼を障えられて見たてまつること能わずと雖ども、大悲倦むこと無くして、常に我が身を照したもうと^上

又た靈芝律徳の云く、⁽³⁵⁾

大光明の中には、決して魔事無し。猶し白昼に奸盜成じ難きが如しと^上

加しかのみならず之、基公、感師、志を一にし、力を勦せて俱に浄土の行人には全く神鬼魔の留難無しと曰えり。

問て曰く、『法華』には「若魔若魔子皆不得便」⁽³⁶⁾と説き、神咒には「魔鬼鄣礙皆消滅故」⁽³⁷⁾と宣べたり。又た『金剛頂經』に云く、⁽³⁸⁾

彼の釈獅子、皆な無比陀羅尼、瑜伽法を獲得するに由るが故に、魔軍を摧破して一切を利樂すと。又た云く、若し諸の魔等、暴悪の者有れば、此の人の所に於て、皆な歡喜を生ず、と。

又た云く、⁽³⁹⁾

凡そ行者、勝善の事を求むるに、悪魔障礙して常に人の便を伺いて、或は屏廋の処、或は穢惡の処にして能く惱害を為すことを被る。応に密契を以て加護して使りて得せしむること勿れ。⁽³⁹⁾

又た云く、「諸の悪鬼神、並に皆摧伏す」と。

又た云く、⁽⁴¹⁾「金剛」の上に暴惡の身を現じて魔王憍慢の心を摧伏す」と。

又た云く、⁽⁴²⁾

爾の時世尊、諸の行人に告げて言く、上の如く三摩地を修し、已れば現世に無上菩提及び種種功德の悉地を獲証すること自在にして意の如し。天魔竜鬼、便を伺うこと得ること無し。人天敬重して一切の事業、速疾に円満す^上。

又た『出生菩提心經』に云く、⁽⁴³⁾

爾の時、仏彼の波羅門に告げて言く、此の三千大千世界に百俱致^{此に梵語に俱致は俱致、此の諸魔宮殿有り。}の諸魔宮殿有り。彼の一一の魔に俱致数の魔衆眷属有りて围遶せり。彼の諸の魔輩、常に方便を勤めて此の経を滅せんと欲して種種の因縁を作す。彼の因縁に因て所在の処に随いて、諸の障礙を作す。所以は何ん。若しは三千大千世界の所有の衆生を以て、皆悉く阿羅漢果を得。若しは善男子善女人有りて、此の修多羅を聞き已らば、当に阿耨多羅三藐三菩提心を発すべし。婆羅門、是の因縁を以て俱致数の諸魔をして方便を勤求して、此の経を滅せんと欲せしむ。所以は何ん。此の修多羅は是れ一切諸法の種性根本なり。是の義を以ての故に俱致の諸魔方便を勤求して、此の経を滅せんと欲す。爾の時に仏波羅門に告げたまわく。今、修多羅有り、名て破魔衆会と汝等^{なんだ}ち受持誦誦せば、即ち彼の魔天衆会を破することを得。^至爾の時世尊、即ち陀羅尼を説て曰く^{云云}之を以て之れを觀れば、円密の行者も亦た

魔障を撥却する者なり、何如ん。

答て曰く、夫れ聖道の修行には波旬競い襲わざるに非ず。襲来すれども行人故さら自力を励して之れを対治す。浄土の勤修には元来り魔王強弩を張らず。魔民甲冑を著せざるが故に、対治魔事の方法を闕くのみ。夫れ競と競わざると、治と不治と、その優劣判然たり。夫れ重瘵に嬰りてに耆扁が治療に値わんと。之れ五内に恙が無くして葛華が秘方を用いざると、憂喜其れ何如んぞや。学者商量せよ。

問て曰く、『法事讃』に曰く、

仏、衆生の四魔の障あつて、未だ極樂に至らずして三塗に墮せんことを恐る。直心をもつて実に行ずれば、仏迎來したまうと^上

所判の如くんば、浄土の行者に魔障有るが故に、如来來心垂れたもう者をや。

答て曰く、実に魔事無し。且く是れ余教に因準するの解釈なり。定執を生ずること莫れ。矧や又た是れ如来の対治にして、行者の期心に非ず、所以に聖道に異り、学者知ぬべし。

問て曰く、『観念門』に云く、

又た行者等、眷属六親、若し來りて看病せば、酒肉五辛を食せる人有らせしむること勿れ。若し有らば、必ず病人の辺りに向うること得ざれ。即ち正念を失して鬼神交乱し、病人狂死して、三惡道に墮す。願ば行者等、好く自ら謹慎みて仏教を奉持して固く見仏の因縁を作せと^上

解釈炳焉なり。西方の行人専ら波旬の留難に値いて、往生の大益を失する者ならん。

答て曰く、是れ亦た縦逸に不浄の凶党をして聖衆來迎の梵場に近づけざらしめんと欲して、一往抑止方便の嚴制を加う。二往は然らず。智人、自ら知れ。

瑛師の『修証儀』に云く、

彼は五陰を以て境と爲し、境は是れ生死幽暗の法なり。十乗の理觀を以て之れを研くに、能く九境の魔事を發す。『楞嚴』に説くが如きは、皆な五陰に由るが故に、魔の現るること有り。是を以て諸經論傳に、凡そ修觀を明すに、並びに出魔の事を弁ずることを須ゆ。恐らくは其の現ずる時、行人識らずして若し取著を生ずれば、即ち群邪に落ちるが故なり。此れは弥陀を以て境と爲し、境は是れ果人にして清淨の功德なり。十乗の行滿じて永く十境の魔事を絶す。是れを以て淨土の一門、諸經論傳には皆な魔事有りと言わず。故に知ぬ、但能く經に依て想を作せ。心に邪念無くんば、則ち聖境現前し、光明顯發して能く自己の幽暗を破し、五陰の生死を滅するなり。上

文見易きが故に註せず。夫れ生死交り謝る。一生の光陰幾か有り。去來不定なり。万物の運爲常無し。四零落して移り易く、五蘊遷變して留ること無し。抑、轟轟たる輪轉、更に始め無し。過去亦た過去、幾計の輪廻ぞや。悠悠たる生死、亦た終り無し。未來亦た未來、何計の経歴ぞや。爰に渡りに船を得、闇に明に値えり。謂く超世の大願是れなり。一たび南無と稱すれば、五逆忽に消え、常念執持すれば上品上生す。『十二仏名經』に云く、⁴⁷

若し人、仏名を持ってば、衆魔及び波旬、行住坐臥の処、其の便を得ること能わず⁴⁸。
南無阿弥陀仏。

鶴林帰嚮勝 第四十四

夫れ、真言明妃陀羅尼藏の犯重の人を化するや。只だ康日修入の彙を濟い、大乘十二分教の首題、逆謗の徒を利するや。未だ終焉誦持の機を扶けずして、爰に吾が淨土の教益は然らず。一形造惡の愚人等、与果現前の時、初めて善知識の超世大願の玄極を説きて、転教口稱せしむるに値いて、僅に心念語唱す。

于の時に弥陀至尊、本願を捨てたまわず、来りて大悲に応じたもう。聖衆来迎するが故に、刹那の頃に於いて、西方に即詣す。斯の如き勝妙の事、諸教の中に於いて闕けて書せず。唯だ弥陀教中のみ特り獲麟廻心の巨益を明すのみ。智人商量せよ。

曰く、敢て問う、曰く、王舎城中所説の『阿弥陀経』に曰く、

下品上生の者とは、或いは衆生有りて、衆の悪業を作る。方等經典を誹謗せずと雖も、此の如きの愚人、多く衆悪を造りて慙愧有ること無し。命終らんと欲する時、善知識の為に大乘十二部経、首題の名字を讃ずるに遇えり。是の如きの諸経の名を聞くを以ての故に千劫の極重の悪業を除却す。智者復た教えて合掌叉手して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に五十億劫生死の罪を除く。爾の時、彼の仏、即ち化仏、化觀世音、化大勢至を遣わして、行者の前に至らしめて讃じて言く、善男子、汝、仏名を称するが故に諸罪消滅せり。我れ来りて汝を迎う^上。

夫れ末後の念想は、生死の折角なり。鶴林の称名は往生の正因なり。故に大善知識、慈悲老婆心を以て、十二部経に代りて、六字の尊号を唱せしむ。嗚呼^あ宜なるかな、一念称揚の力は殆ど十二分教を誦持するに超えたり。須臾持念の功は、頗る諸仏の名号を唱念するに過ぎたり。然れば則ち、念仏三昧の功德は、婆伽至尊猶お測量に泥み、底下の愚童、豈に竿許^{さんきょ}することを得んや。凡そ驪珠^{りしゆ}を得ざれども、七宝の国土に遊び、神丹を服せざれども、無量寿域に到る。只だ是れ、本願名号の不共の別徳なるのみ。檀摩訶毘尼衍の往躅、此の中に応当に広く説くべし。抑、瞑目氣絶の迴心は、薩埵の本誓より起こり、眼光落地の仰頼は下輩の三品に明かなり。行者心を留めて思量せよ。於、曠劫会稽の耻辱^{はすかしめ}を終焉の一念に断雪^{すずぎきよ}め、無始輪環^{しほりなむ}の縲紲^{しほりなむ}を無後の十声に断つ。寔に陣に臨んで、矢を作れども、猶お勝つことを得、渴に臨んで井を掘れども、善く喉を湿すと謂いつべし。胡ぞ、思議すべけんや。

曰く、敢て問う。曰く、設い円密二宗の諸經の中に、臨終初心の人の直ちに生死を截断するの義相を明すこと有りと雖も、只だ是れ三学式内の得益にして、全く六字格外の大利には非ず。学者商量せよ。夫れ沙羅林色を變ずるや。月輪猶お二月三五の夜雲に隠れ、白鷺池に水澗くるや。青蓮亦た五濁悪世の春嵐に萎めり。三界の特尊も留まらず。十地の聖人も同じく去る。具縛の下凡、豈に然らざらんや。所以に朝に官祿に誇る人も暮には岱邱の煙と昇り、きのう昨容飭を緯とせしの曇いも、今は郊原の塵に交る。きょう南無阿弥陀仏。

仏前重説勝 第四十五

夫れ八事の開遮には幅内・幅外の諍い有り。五部の異執には大衆・上座の論有り。是れ則ち親り如来の前に於て之れを沙汰せざる所以なり。然るに今此の『觀經』は大徳牟尼婆伽、耆闍崛山従り没して、王宮に於て正しく国母毘提の為に十六想觀の方軌を直示し、侍者慶喜、王舎大城自り還りて鷲嶺に在りて、親り教主慈尊に向うて九品往生の始終を重説す。

『經』に云く、⁽⁴⁹⁾

爾の時世尊、足虚空を歩みて耆闍崛山に還りたまう。爾の時阿難、広く大衆の為に上の如き事を説くに、無量の諸天及び竜・夜叉、仏の所説を聞きて皆な大いに歡喜して仏を礼したてまつりて退きぬ。

^{上巳}

『疏』の第四に之れを受けて曰く、⁽⁵⁰⁾

耆闍會の中に就いて亦た其の三有り。一に「爾時世尊」従り已下は耆闍の序分を明かす。二に「爾時阿難」従り已下は耆闍の正宗分を明かし、三に「無量諸天」従り已下は耆闍の流通分を明かす^{上巳}と。

又た玄文に云く、⁽⁵⁾

此の『観経』一部、両会の正説なりと言ふと雖も、総じて斯の一を成ず⁽⁶⁾と。

夫れ三百余会の転法輪を案ずるに未だ両会の重説は有らず。只だ吾が浄土の一教のみ此の秀句有り。尤も以て一勝と為るに足れり。

抑⁽⁷⁾『涅槃』の第二十三に云く、⁽⁸⁾

人身得ること難きこと、優曇華の如し。我れ今已に得たり。如来、値い難きこと優曇華に過ぎたり。我れ今已に値えり。清浄の法、実に見聞すること得ること難し。我れ今已に聞く。猶し盲亀の浮木の孔に値えるが如し。人命停まらざること山水よりも過ぎたり。今日は存すと雖も明らかなんまで亦た保ち難し。云何ぞ心を縦にして悪法に住せしめん。壮なる色の停まらざること、猶し奔⁽⁹⁾れば馬の如し。云何ぞ恃⁽¹⁰⁾怙⁽¹¹⁾んで憍慢を生ぜんや。⁽¹²⁾

南無阿弥陀仏。

【注】

- (1) 智頭『菩薩戒義疏』(『正藏』四〇・五六三上)。
 (2) 法賢訳『大乘無量寿莊嚴經』(『正藏』一一・三二六上)。
 (3) 曇鸞『往生論註』(『正藏』四〇・八三九上)。
 (4) 珍海『決定往生集』(『浄全』一五・四九〇上)。
 (5) 龍樹『菩提心離相論』(『正藏』三三・五四一中)。
 (6) 明恵『摧邪輪』(『浄全』八・六八〇上)。
 (7) 出典未詳。良忠『往生要集義記』(『浄全』一五・三四九下)等と同文あり。
 (8) 明恵『摧邪輪莊嚴記』(『浄全』八・七七七上)。
 (9) 明恵『摧邪輪莊嚴記』(『浄全』八・七七七下)。
 (10) 明恵『摧邪輪莊嚴記』(『浄全』八・七七九上)。
 (11) 出典未詳。澄円『夢中松風論』にも「但し菩薩に智増・悲増の二類あり」(『統浄九』一六六頁上)として『大智度論』を引く。
 (12) 曇無讖訳『涅槃經』(『正藏』一一・五九〇上)。
 (13) 『十住毘婆沙論』(『正藏』二六・二三中)。
 (14) 『法華文句記』(『正藏』三四・五一上)。
 (15) 一行『毘盧遮那成仏經疏』(『正藏』三九・六八二下)。
 (16) 一行『毘盧遮那成仏經疏』(『正藏』三九・七二八中下)。
 (17) 『南華真經』「人間世」
 (18) 『南華真經注疏』四
 (19) 普光『俱舍論記』(『正藏』四一・二下)。
 (20) 空海『真言問答書』(散逸)。
 (21) 道綽『安樂集』(『浄全』一・七〇六下)。
 (22) 『無量寿經』(『浄全』一・七)。
 (23) 『無量寿經』(『浄全』一・二二一～二四)。
 (24) 『阿弥陀經』(『浄全』一・五三)。
 (25) 『称讚浄土經』(『浄全』八一・七七)。
 (26) 善導『法事讃』(『浄全』四一・八下)。
 (27) 道綽『安樂集』(『浄全』一・七〇七上)。
 (28) 基『阿弥陀經通贊疏』(『正藏』三七・三四二下)。
 (29) 『無量寿經』(『浄全』一・九)。
 (30) 善導『観念法門』(『浄全』四・三三三下～三三四上)。
 (31) 源信『往生要集』(『浄全』一五・四九下)。
 (32) 『観無量寿經』(『浄全』一・四四)。
 (33) 元照『阿弥陀經義疏』(『浄全』五・六七七下)。
 (34) 源信『往生要集』(『浄全』一五・八五上)。
 (35) 元照『観経義疏』(『浄全』五・二六三上)。
 (36) 『法華經』(『正藏』九・六一上)。
 (37) 玄奘訳『十一面神呪心經』(『正藏』一〇・一五二上中)。
 (38) 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』(『正藏』一八・三三四下)。
 (39) 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』(『正藏』一八・三三四下)。
 (40) 円仁『金記浄地記』(『正藏』七五・三八上)。
 (41) 覚超『金剛三密抄』(『正藏』七五・六八〇下)。
 (42) 覚超『金剛三密抄』(『正藏』七五・六九一下)。
 (43) 出典不詳。
 (44) 『法事讃』(『浄全』四・二下)。
 (45) 善導『観念法門』(『浄全』四・二七七上)。
 (46) 摂瑛『修証儀』、散佚の為出典不詳。
 (47) 闍那幅多『説十二仏名神呪较量功德除障滅罪經』(『正藏』

- 二一・八六二中）。
- (48) 『観無量寿経』（『浄全』一・四九）。
- (49) 『観経』（『浄全』一・五一）。
- (50) 善導『観経疏』（『浄全』二・七二下）。
- (51) 善導『観経疏』（『浄全』二・三三下）。
- (52) 曇無讖訳『大般涅槃经』（『正藏』一二・四九八下）。